

氏名	堀 智 晴
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	第3806号
学位授与年月日	平成12年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第2項該当者
学 位 論 文 名	保育実践研究の理論化の試み ー障害児保育の実践研究を通してー
論文審査委員	主 査 教 授 倉戸ヨシヤ 副主査 教 授 岩堂美智子 副主査 教 授 畠中 宗一 副主査 教 授 桂 正孝 (文学部)

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、保育実践の研究方法に関して理論化を試みたものである。特に本研究では、障害児保育の実践研究を中心に考察を行った。

第1章では、保育実践と保育実践研究を定義した上で、保育実践研究の必要性和意義について述べた。

第2章では、保育学における保育実践研究の位置付けについての諸説を紹介した。また津守貞氏の実践研究の方法論についてその特質を明らかにした。

第3章では、保育実践の研究方法の理論化の試みとして、保育実践を検討する視点として、「子ども理解」「子どもへの願い」「手だて」という相互に関連し合う三つの視点を提示して、それぞれの実践的な意義について解説した。

「子ども理解」では、「一般的な子ども」の理解にとどめず、固有名詞で特定して「＜この子＞理解」へと深められる必要がある点を指摘した。また、障害児の場合、「子ども理解」の諸相とその背後にある子ども観があることを明らかにし、それについて考察した。

「子どもへの願い」とは、保育実践が本人の願い、親の願い、保育者個人の願い、保育所としての願い、保育所のある地域の願い、現代の子どもへの願いなどの多様な願いによって構造的に構成されていること、特に保育者の子どもへの願いは、保育者個人の価値観に影響を受けること、また、「子どもへの願い」は時代性と地域性にも規定されていることを指摘した。

「子どもへの手だて」としては、「＜この子＞への手だて」「グループ（仲間関係）への手だて」「集団への手だて」の連動する3つを考えた。実践研究の一例として「子どもの関係図」を作成して行う実践研究の例を提示した。また、保育者の役割は「子ども同士の育ち合いを育てる」ことにあると指摘した。

第4章では、堺市、箕面市、豊中市、高槻市における障害児統合保育の実践研究の実際を分析・考察した。堺市における研究指定園の制度、箕面市における実践記録を活用した研究方法、豊中市、高槻市の実践研究における専門家の役割について考察した。また、障害児通園施設職員の親として生き方と子どもとの関わり方についても考察を行った。

第5章では、本研究のまとめをかねて、「インクルージョンと子ども理解」について、障害児の教育の歴史の変遷を踏まえて考察した。障害児の教育は特殊教育、統合教育、包括教育へと変化し、インクルージョンの子ども観はchild with special educational needs（子ども、特別なニーズのある）という見方に転換したことを明らかにしてその意義について述べた。最後に、「子どもの生き方」という仮説的な子ども理

解の方法について事例をあげて考察した。

今後の課題としては、さらに保育実践研究の事例研究を積み重ねながら、理論モデルの問題点を克服し、より体系的な方法論の構築をめざす必要性を述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は5章251ページから構成されているが、著者の20年にわたる保育実践研究を踏まえて、保育研究の必要性和問題点を明らかにし、それらの理論化を試みたものである。「研究の目的と方法」と題された第1章ではいまだに保育学固有の学問的パラダイムをもたない保育実践の現状と問題点に触れながら、その理論化の必要性を論じている。そして、1) 保育実践の記録を取る 2) その記録をもとに分析・検討する 3) 実践の評価の3点を理論化へむけての課題としている。このあたりは実践と研究が遊離したものではなく、相補に関係しあい、循環すべきとする著者ならではの論考で、説得力がある。第2章「保育研究と保育実践研究」では、著者なりの考え方を先行研究や文献に照合して、とくに津守真の子ども理解をとりあげ、クリティークしている。医学は医学モデルがあり、発達心理学には発達理論があるが、保育にはそれらを鵜呑みにしているきらいがあり固有の理論のないことを指摘している。そして著者はインテグレーション保育に魅せられていくが、やがて独自の方法論を模索するようになる。そして、第3章「保育実践研究の理論化の試み」において、著者のこれまでの研究についての知見が集約され、それを踏まえての彼独自の方法論が提示されることになる。「子ども理解」「子どもへの願い」「手だて」の相互に関連し合う研究方法であるが、それはまさに著者ならではの子どもの立場に立った理解であり、多くの示唆に富むものである。第4章「障害児保育の実践研究では」上記を裏付ける現場での実践の要約である。第5章では「インクルージョンと子ども理解」であるが、著者の構築してきた理論化をひろく障害児教育の研究史のなかで位置付けたものである。1) 特殊教育 (mental deficiency, feeble minded) 2) 障害児教育 (disable child) 3) 統合教育 (child with disabilities) 4) 包括教育 (inclusive education) という潮流のなかで彼の方向性は包括教育の流れに添うものであり、child with his/her own needsの流れに位置づけされる。

審査委員会においては実践に裏付けられた研究方法の理論化の提示はオリジナリティに富み、包括教育をさらに展開する可能性をもったものとして高く評価された。よって本論文は形式と内容において博士(学術)の学位に値するものとして適と認められた。